

古文 読解問題 「更級日記」 物語・源氏の五十余巻 ①

かくのみ思ひくんじ^アたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。^①紫のゆかりを見て、^②続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。誰もいまだ都なれ^イぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へと、心のうちに祈る。親の太秦にこもり給へるにも、ことごとくこのことを申して、^③出でむまにこの物語見果てむと思へど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆^ウか^エるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、「いとうつくしう生ひなりに^エけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしきものは、^④まさなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ。」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、^⑤在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

はしるはしる、わづかに見つ心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交じらず几帳の内にうち伏して、引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧^⑤の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ。」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、我はこのごろわるきぞかし、盛りにならば、容貌も限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君の^オやうにこそあらめ。と思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。

問一、次の「更級日記」の説明の空欄a～cに入る言葉を答えなさい。

「更級日記」は（ a ）時代中期ごろに（ b ）によって書かれた日記文学である。（b）は学問の神様で知られる菅原道真の子孫で、「（ c ）」を書いた藤原道綱母と親戚関係にある。

問二、傍線部ア～オの助動詞の意味を答えなさい。

問三、傍線部①「紫のゆかり」と傍線部⑤「在中将」が指している作品として適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア、源氏物語 イ、枕草子 ウ、伊勢物語 エ、蜻蛉日記 オ、伊勢物語

問四、傍線部②「続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず」を現代語訳しなさい。

問五

傍線部③「出でむままにこの物語見果てむと思へど、見えず」とあるが、このときの作者の心情として最も適切なものを次の選択肢から選りなさい。

ア.「源氏物語」に心をひかれているものの、物語ばかり読むのはよくないと考え、自制すべきだと感じている。

イ.「源氏物語」をすべて読み終えたいと強く願っているが、本が見つからず、思うように読めないことを悲しく、もどかしく感じている。

ウ.「源氏物語」の続きを読みたい気持ちはあるものの、日常の人付き合いが忙しく、読書に集中できないことを残念に思っている。

エ.都に來れば容易に「物語」を書くきっかけを見つけることができると思っていたため、現実との違いに戸惑い、期待が外れたことを残念に思っている。

問六

傍線部④「まさかなりなむ」の文法的説明として最も適切なものを次の選択肢から選りなさい。

ア.ク活用の形容詞 + ナ変動詞の活用語尾 + 推量の助動詞

イ.ク活用の形容詞 + 完了の助動詞 + 推量の助動詞

ウ.ク活用の形容詞 + 強意の助動詞 + 推量の助動詞

エ.ク活用の形容詞 + 終助詞

問七

傍線部⑤「の」と同じ用法で使われているものを次の選択肢から選りなさい

ア. 白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ、魚を食ふ。(伊勢物語)

イ. 草の花は、なでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。(枕草子)

ウ. 上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海^{うしなみ}のほとりにて、あざれあへり。(土佐日記)

エ. 白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを (伊勢物語)

問八

本文中から作者が「源氏物語」のすばらしさを表した部分を十字以内で書き抜きなさい。

読解問題 「更級日記」物語・源氏の五十余巻」① 解答・解説

問一 a 平安 b 菅原孝標女 c 蜻蛉日記

問二

ア 存続
イ 打消
ウ 自発
エ 詠嘆
オ 比況

問三 ① ア ⑤ オ

問四 続きが見たいと思われるけれども、人に相談することもできない。

問五 イ

問六 ウ

問七 ア

問八 後の位も何にかはせむ